



子供讃歌 (二)

倉橋惣三

二 角帽生の子供遍歴 (一)

1 兒童研究——元良勇次郎先生

角帽にはかどがある。彼の引きつゞいてのお茶水の幼稚園通いも、兒童心理研究という、四角つばい名目が、くつついて來た。幼稚園の先生方からみれば、相變らずの青二才、幼兒たちからは、相變らずの『おにいさん』、當人としても、相變らずの子どもすきの坊やなのだが、たゞ此頃聽講しだした心理學の講義や、讀み初めた兒童心理學の書物が、彼の頭に、子どもを概念化し、その興味を理論ばらせて、いささか好ましくない傾きを與えずにいない。幸まだ教育學を學んでいなかったから、いやに先生振りにはならなかつたけれども、假りにも研究のためという下心で接されるのは、子どもにとつて、さぞかし水臭いところがあつたろう。パウルドキンの精神發達論のゼミナリーをしてゐる時なんか、子どもに、こういう描畫をしてみて呉れの、こういう行動をしてみて呉れと、自分にもよく分らない、さま／＼の注文を出して、はなはだ、實際保育のお邪魔をしたことと思ふ。それも時たまならまだしものこと、白織帽時代からのおなじみをいゝことにして、入りびたりなんだから御迷惑千萬。それを大目にて呉れた、あの時の幼稚園主事さんは、よつぼど氣の大きい人だつたに相違ない。それが兒童心理學の卒業論文を書いた後も、引きつゞき大學院にかけてのことだから、御厄介になつた年月は随分と長いことになる。彼が兒童學の學徒として、當時の園児たちの恩を忘れたら罰があたる。少くも、彼の生きた兒童研究はお茶の水の幼稚園で育てられたといつていゝ。

彼のその頃のこと、『帝大教授學生氣質』という本に、面白おかしく書かれている。その本は明治三十四年の出版で、著者はどういふ人か知らないが、貴重(?)な文献(?)としてその一節を引用させて貰う。

『君は大きくなつても、幼稚園(筆者註、お茶の水の幼稚園)通ひばかりして居る。大學よりは幼稚園の方がいとみえる。「大きな赤ん坊だよ」など、同級生がよく悪口を言つた位のもので、大學を卒業してから後も、今だにせつせと幼稚園通いをして居るが、自身から子どもが好きだと言つて居る。

そしていつも幼稚園へ行つては、可愛い女の子に折鶴を折つてもらつたり、腕白な男の兒に繪を書いて貰つたりして喜んで居る。「モシ、龜よ龜さんよ」の踊だの、「お母さんお父さん早く出て御覽んなさい。お月様が出ました、圓くく出ました」の唱歌(筆者註、そういう唱歌がその頃あつたものかどうか、此の點だけは怪しい)などを唱つたり、踊つたりなどして居るのを見たり聞いたりすると、君はもう、嬉しくて耐らないと言つて居る。

それ故自分もいつの間にも子供のよくな氣になつていつて、方々のおもちや屋へ行つては、いろんな玩具を買つて来る。そうしてそれを床の間へ並べて見ては喜んで居る。

つい此の間も、何處のおもちや屋で買つて来たか、小さな箱の抽出しをあげると、突然鼠がヒョイと飛び出して來やうといふ可笑しなおもちやを買つて來て、泣かずに罪なく遊んで居た』

それにしても、彼がいつも忘れないのは、心理學教授元良勇次郎先生の御指導である。先生は、謹嚴で有名な學者で、どつちかといえば、哲學的心理學者の方だつたが、アメリカでスタンレーホールに學ばれた關係から兒童研究には特別の興味をもつておられた。歸朝後は、我國兒童研究の先驅者、高島平三郎、塚原政治、松本孝次郎氏等と共に日本兒童學會を組織して、その會長をしておられた位で、彼の兒童心理研究には懇な便宜を與えられた。但、先生の指導は、どこまでも若い者の自ら向うところを生かすゆき方で、多く説かれるよりは、いつも、よい聴き手になつて下さつた。決して御自分の型に入れようとせられることはなく、餘り哲學的でもない彼の幼稚園通いの報告も、堅くしまつた唇を軽く曲けてほゝえむお癖の、上品な表情で靜に聽いて下さるといふ風であつた。

それに、先生はほんとうに學者らしい學者であつた。理論と事實、學問と實際との間に一應ひかるべき劃線を、はつきりひいていられた。それで、先生御自身は、理論の人、學問の人でありながら、理論よりも事實を捉えていこうとする彼の態度をも肯定せられた。又、學問よりも生活、實際に生きた關心をもつ彼の傾向にも深い理解を與えら

れた。従つて所謂學者の指導に往々あるような、理論で事實を片づけたり、學問と實際關心を混同させられたりするような誤りを、一度も彼は經驗させられなかつた。つまり、元良先生は、御自分の流儀で他を律することの、毛すぢ程もない方で、彼にも、未熟のまゝにその流儀を伸させて下さつた。この點は彼のみでなく、先生の指導を受けたすべての學生の大きな幸であり、皆が眞に先生として心から敬慕した。彼自身としてもその幸福を、心理學研究室と御自宅の書齋とで、いつもしみんと味わませていた。後に彼がアメリカ留學中、老スタンレーホール先生をその自宅に訪れ、『元良君は、わたしの學生だつた。君は元良君の弟子だから、學問上の孫だね』といつて親しみ多く迎へられた時も、『ほんとうに私は元良先生の弟子ですから』と、この幸福を思い浮べたことであつた。元良先生の御指導の賜で、彼は兒童心理學者の兒童知らずといつたことにならずに濟んだ。有難いことである。

2 二葉保育園——野口幽香女史

中央線信濃町驛から土手を北へ降りると、その邊さめが、橋一劃は、當時の有名なスラムであつた。そこにある二葉保育園へ、彼は屢々通つた。

『にいちやん。きょうも來たな』

身のたけのあわない着物、べちやんこな古下駄、額の黒い頬の蒼い子どもの群が、がや／＼とたかつて來る。お茶の水の園兒にくらべて、みかけのところ、だいぶちがう。きれいずきの彼は、始めのうちは、額の筋肉をしいてこつかせて、そのきたない群の中に立つたものだ。しかし、その騒々しさが耳になれ、部屋の中のむつとしたいきれが鼻になれてきた頃には、その子どもたちと懇意になつた。懇意になつてみると、どの子も眞卒でかわい。あらゆる口のみゝ方の底に親しみがある。ぶつかつてくる動作の奥にやさしみがある。お茶の水の園兒たちよりといつてはいゝ過ぎるが、それと少しもかわらないよさが感じられる。たゞどうも、彼の心の一隅には、同じものを、わざと同じとする特殊意識や、同情されようともしないものを同情してやつていくという差別意識が動いて、貴婦人のベールのように、外からは美しくみえて内からは目をくもらせる。その隔ての根こそぎ除かれることこそ、こゝに通う意義なのだ。またしても、美しい不純が湧く。

『おゝおゝ、よくおいで』

そんな時、静かな調子で、青年の後ろから聲をかけられるのは、野口幽香女史である。

野口女史は、本務の女子學習院から、午後こゝへまわつて來られるのが常で、子どもたちは、駆け寄つて、

『先生こんにちは』

と、丁寧にお辭儀をする。女子學習院教授服の濃紺の袴を、靴のかゝとのかくれるまで、長めにはいてゆつくり子どもたちの間を歩きながら、にこやかな會釋で應えられるまにも、その細い手は子どもらの頭に、やさしく觸れる。青年は女子學習院の幼稚園をも參觀したことがあるが、そこでの女史の態度と、こゝでの態度とに少しの變りもない。彼は後に多くの保育園を視察したが、子どもらに對する先生方の態度が、たいそうぞんざいだつたり、いやに丁寧だつたりするのに、時々とまどいさせられることがある。殊に、園長とか主任とかいう柄の人に、『慈善』が鼻についたり、『事業』が目についたりすることも稀でない。少くも特殊の世界を強く感じさせられ風がある。それに比して、ヒュマニズムもリアリズムも、とうに洗練せられて、精神的にあかぬけきつている野口女史には、そういう『特殊』が、どこにも感じられなかつた。淡々というは當らないが、こうした働きをする人に往々あるねつとりしたものの、みぢんもないのが彼は大ききであつたし、教えられるところが大きかつた。

但し二葉保育園における彼は、お茶の水の幼稚園におけるように、子どもにほんとうに接したとはいえない。こゝでは、子どもと遊び、乃至、子どものために教育的に考えるだけでは子どもに觸れられない。その身邊の世話にこま／＼とゆき届くことが、子どもと共にいる極意だつたのだ。それは、角帽青年の手におえることではなかつた。しらくも頭を汚たながつた譯でもなく、しらみをこわがつた譯でもないが、どうも子どものかゆいところまで手が届かない。心では愛し、ためを思うというが、肝心の手が働かない。ふところ手という譯ではないが、手袋をしてかゆきを搔くという外はない。お上品な手袋の滑かさはあつても、子どものはだにぢかには觸れない。子どものはだに觸れられないから、保育所の眞髓も體驗できない。彼は、その大事な眞髓を徳永恕子さんその他のまめ／＼しい保母さんの後ろで傍觀している、お話の上手なお客分に過ぎなかつたといつた方が正直なところだ。しかし、彼は、二葉保育園、殊に野口女史の寡黙の教訓によつて、保育所と幼稚園とは、子どもを保育している場所として、何の差別のないことを、つまり幼児の社會境遇によつて變りない保育觀を、彼の幼児教育修業の初めから辭づけられた。これが後に施設の對立論の間に立たせられることの屢々ある彼のためにどの位有益な初めの經驗であつたか測り難い。(つゞく)